

ももかわがくあんひつ きょうちしゅんけいのず
「百川学庵筆 鏡池春景之図」

いっぷく けんほんちゃくしよく こうか ねん
 一幅 絹本著色 弘化3年(1846) 縦43.5cm 横57.7cm

本図は、現在では失われてしまった、江戸時代の景勝地を描いた作品です。作者の百川学庵(寛政11(1799)～嘉永2年(1849))は弘前藩士で儒者の家系に生まれました。幼時から絵を好み、江戸での勉学中に谷文晁の画塾に出入りして絵の腕を高めたと言われています。

題名の「鏡池」は鏡湖、鏡の池などとも言いますが、文学的な雅名なので、この解説では溜池、南溜池と表記します。南溜池は、本来は、城下町弘前の南を限る防衛線として慶長17～19年頃(1612～14)に築造された人工の貯水池でした(参考図Ⅰ下部中央の藍色部分)。藩の官撰史書『津軽一統志』によると、夫夫一人を投じて池を掘らせ、土手を築かせる大工事でした。なお、参考図Ⅰで池の東北にある放水路は、後に南側につけかえられています。

その後、慶安2年(1649)の大火を機に溜池の南に寺町が移転したことで、南溜池は都市景観として城下町の内部に取り込まれるとともに、当初の防御施設としての役割を忘れられていきました。娯楽の少なかった時代のことで、水辺の土手に人が集まるとは、春は花、夏は納涼、秋には月を愛で、冬には子どもたちが氷渡りをしたようです。また、塵芥の捨て場や雨乞いの場でもあり、水は灌漑用水として取水されました。

しかし、湿地帯を流れる小川を堰き止めた人工池ですから、徐々に土砂が流れ込み、浅くなっていきます。菅江真澄が寛政8年(1796)に弘前を訪れた時には「水が無いのに鏡の池と呼ばれるが、水が枯れたところに橋がかかって風情があり、花の季節ならさぞやと思われ」と書き残しています。この記録から、既に水枯れているものの景勝地であることと、桜が植栽されていたらしいことがわかります。

この後、文化3年(1806)、安政5年(1858)に池が掘り替えられ、水が満たされました。背景には蝦夷地警備などの事情がありました。軍役負担を賄うための安定的な米穀生産、そのための灌漑用水確保が主目的だったので、池は藩士の水練の場となり、南岸に置かれた矢場では射撃訓練が行われて、藩主が検閲しています。満々と水を湛えた本図『鏡池春景之図』ののどかな風景は、幕末の緊迫した状況が生み出したものなのです。岩木山と南溜池を描いた絵画は本図以外にも何枚か確認されていますが、どれも幕末から明治にかけて描かれています(参考図Ⅱ)。

本図には百川学庵自身の贅が添えられています。以下は大意です。「鏡池は弘前城南の南にあって周囲は三里。水面に岩木山が浮かぶのでその名がある。池の前のまっすぐな道は南堤で、その下には人家が軒を連ね、左には高い丘があって杉林の中に五重塔が立つ。その向こうの林は白狐稲荷、まっすぐな道は射撃場、鬱蒼たる杉林は城南の寺。その右の橋は極楽橋で、さらに右の雑木越しに在府町、相良町、茂森の寺。左の小橋を渡ると湯口、如来瀬、愛宕の山々、そして西空に聳えるのは岩木山」。桜の満開さながらの城下の繁栄の様子を書き綴っています。この絵が描かれたのは弘化3年11月(旧暦)。真冬に描かれた春の絵です。実は、学庵自身、隠居を命じられて蟄居中の身でした。

明治に入り藩の管理を離れた南溜池は徐々に埋まり、明治10年代には市内の学校の経費を賄う学田が営まれていました(参考図Ⅲ)。現在では、「津軽氏城跡弘前城跡新寺構」として国の史跡に指定されています。

(三上幸子)

(参考資料 『南溜池－史資料と考察』1989年、弘前市教育委員会)



百川学庵筆 鏡池春景之図



参考図Ⅰ 津軽弘前城之絵図



参考図Ⅱ

山形岳泉筆 南塘春望



参考図Ⅲ 士族在籍引越際地図(部分)